HDS-R測定から見える退院先と看護師の関わり

田中美帆[1)]，太田律子[1)]，邉見眞知子[1)]，久保美子[1)]，宮田淳也[2)]，中西美枝[2)]，中西嘉巳[2)]
[1)] 市立三野病院看護師　[2)] 市立三野病院

【緒言】

当院では、入院時の評価の１つとして、改訂版長谷川式簡易知能スケール（HDS-R）を実施している。戦略的なHDS-Rの使い方として、質問時の意識や注意力、態度など患者の反応も観察し、日々の看護ケアに応用している。
そこで、過去1年半に当院へ転院してきた患者を対象に、認知機能と退院先の傾向を再確認したいと考えた。その結果から看護としてどのように関わっていくべきなのかを考察する。

【対象/方法】

地域包括ケア病床に入院した患者95名（男性36名，女性59名　平均年齢76.7±11.0歳）
条件:
- 40歳以上のもの
- リハビリテーションまたは療養を目的に転院してきたもの
- 入院前は自宅で生活を送っていたもの

調査項目と群わけ

入院時に評価したHDS−Rの合計点
（２０点以下を認知群、２１点以上を非認知群）

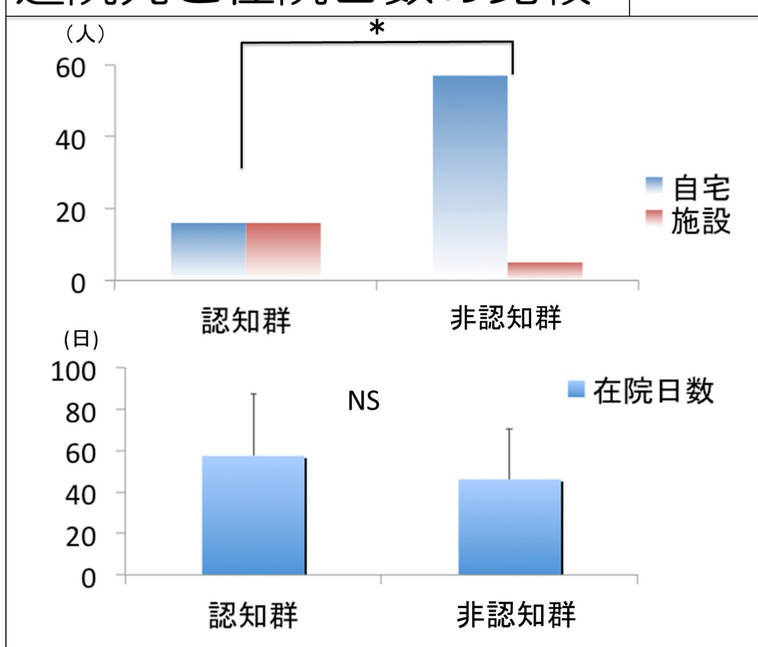
一般情報：
年齢（歳）、性別（男／女）、在院日数（日）
退院先（自宅／施設など）
退院先を決定した１番の理由
（家人介護、社会的背景、患者のADL能力）
主介護者
（子供、子供の配偶者、親兄弟、配偶者）

統計処理

- 認知群と非認知群において退院先と在院日数の比較
  →χ^2検定、対応のないt検定
- それぞれ群内の退院先の理由と主介助者の比較
  →χ^2検定
  下位検定
  →ボンフェローニ補正
- 有意水準は5%未満とした

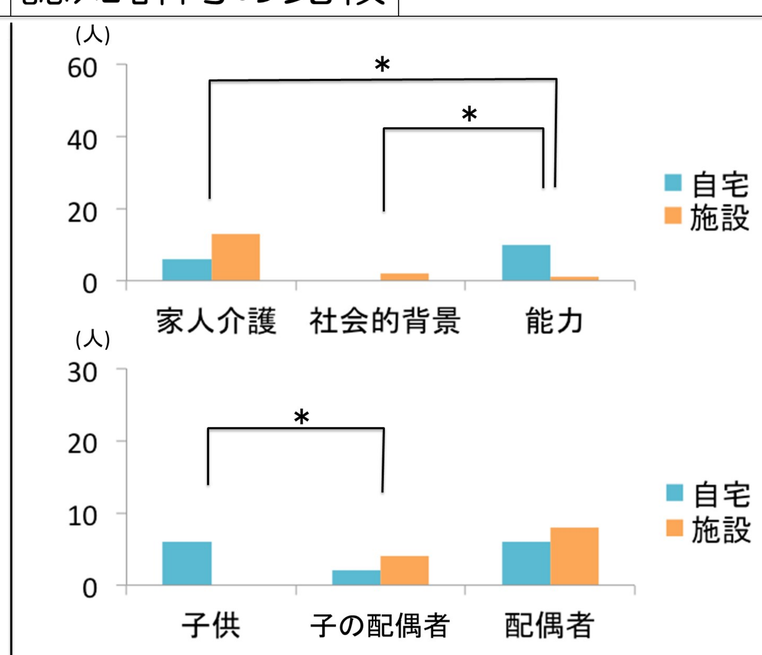
【結果】

退院先と在院日数の比較



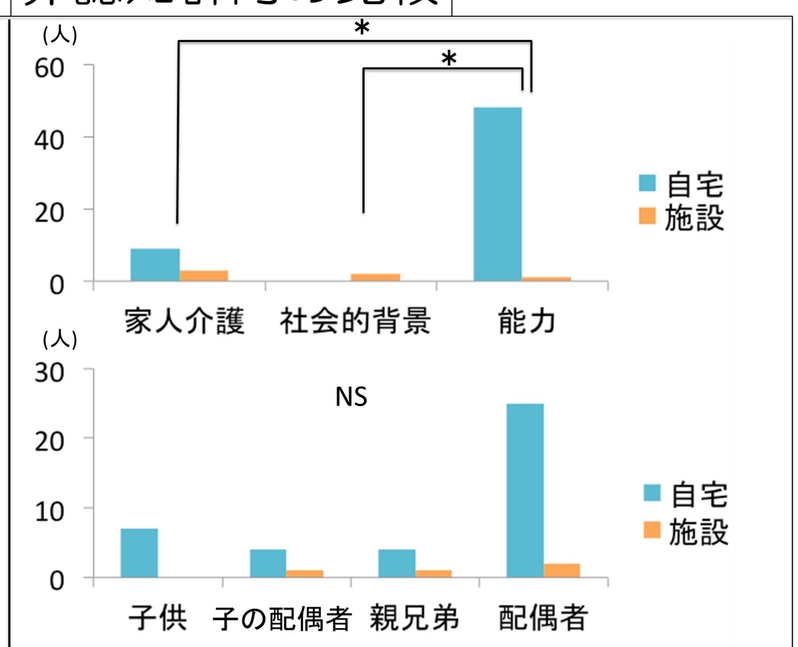
退院先において有意差があった

認知群内の比較



退院先の理由、主介護者において有意差があった

非認知群内の比較



退院先の理由において有意差があった

【結語】

- HDS-Rの点数とそれぞれの退院先を集計した
- HDS-R20点以下の患者は施設への入所となるケースが多かった
- HDS-Rの点数が低くても日常生活動作（以下ADL）能力高いと自宅に退院できる例があり、同居者は子供であることが多かった
- 入院時より患者家族の意向を確認し、また、HDS-Rの点数も指標に、早期よりニーズを理解し退院支援を行っていく必要があることが示唆された

【考察】

低下している患者

退院先の理由
- 自宅での介護量や不安
- 生活上の都合で介護の代替策

↓

施設への入所が多い
- ADL能力が高いと自宅へ退院

主介護者
- 子は社会資源の利用で自宅へ
- 子配偶者であれば介護保険を利用しての施設入所が多い

維持している患者

退院先の理由
- 自宅の環境調節や介護サービスなど社会資源を利用する
- ADL能力が高いもの

↓

自宅への退院が多い

- 経済的な負担から転院を選択

- 認知機能障害によりADL各項目が著明に低下.(横井,2003)
- 患者が自宅復帰に至るためにはADLの向上が必要.(本間,2000)

↓

認知機能が低下した患者は、認知機能が維持している患者と比較して退院先が施設となる割合が高い。

入院中の患者家族において主介護者の介護に対するニーズと精神的な状態が影響していることが推測された

地域包括ケアシステムの一角を担う当院

＜今後の看護師の関わり＞
- 入院中に主介護者の不安の解消
- 自宅での介護に対するニーズを把握
- 退院後でも困った時にいつでも相談できるような関係性の構築

自宅退院を検討するとき、主たる介護者、サポート立場にある介護者、看護師とのそれぞれの役割を踏まえた上での信頼関係を基礎とした介入が重要となる.(Gilmour,JA:2002)

↓

自宅に退院できるような症例が増加する可能性

参考文献
・横井輝夫　他：痴呆性高齢者の認知機能障害とADL障害との関連　理学療法学　18(4)：225-228　2003
・本間昭：痴呆の評価にはどのようなスケールが使われているか. 平井俊策（編）：痴呆のすべて, 永井書店　2000
・Gilmour JA.: Dis / intergrated care: family caregivers and in-hospital respite care., Jounal advanced nursing, 39(6), 546-553,